

銭谷 眞美

文部科学省生涯学習政策局長

「エコツーリズム」の未来形

このたびの「エコツーリズム憲章」の中の説明資料では、「エコツーリズム」を「自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し学ぶこととともに対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかた」と一応の定義をしている。

今日、「エコツアー」を具体的に想像してみてくださいと言われれば、多くの人々は、屋久島における縄文杉の森林をめぐるツアーや小笠原でのホエールウォッチングといった雄大な自然と向き合う「ツアー」を想像するのではないだろうか。

地球温暖化や森林破壊などが進む中、雄大な自然や里地里山に触れ合い、自然に対する畏敬の念や慈しみのこころを育むことは、大変素晴らしいことである。しかし「エコツアー」の真の目的は、ツアーに参加し、感動を覚えることで終わらせるのではなく、ツアーを通じて経験したこと、感じたことを、一人ひとりがしっかりと理解し、そうした理解を下に、実際生活の中で実践に結び付けるようになるという点にあるのではないか。

自然と向き合うことで得られる感動、そうした観念的なことを理解するところまでもっていく上で有効な手段の一つに、社会教育施設などの地域の学習拠点の積極的な活用が考えられる。そうした地域の学習拠点を包含した、懐の広い「エコツアー」があってもいい。

「エコツアー」を成功させる鍵の一つに、山岳ガイドなどの人材育成が挙げられる。確かに人材育成も大切であるが、博物館の学芸員等の専門的な知識を有する人材、そうした既存の学習資源の積極的な活用を通じて、はじめて「エコツアー」が地域と有機的につながり、真の目的を達成することができるのではないか。実際、全国の自然科学系博物館では、例えば県民参加の下、地域に生息する動植物の調査を通じて、自然の大切さを学ぶといった取組などの環境をテーマにした様々な取組がなされている。

また、定義にもあるように、「自然環境」のみならず「歴史文化」の視点も

重要である。日本の「歴史文化」が日本の気候風土の中で育まれたことを考えれば、歴史系博物館や地域の歴史文化についての文献を豊富に備えた図書館なども、「エコツアー」の中に積極的に位置づけることが可能であろう。感動だけでは終わらない、地域とともにある「エコツアー」。そうした「エコツアー」の未来形が全国各地で展開されることを、願ってやまない。

以上